



夕刊

発行所 中日新聞社  
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号  
〒460-8511 電話 052(201)8811

### 紙づつ

女性科学者を増やし、出産や育児を経てもなお活躍してもらいたいとは、今や重要な国策である。だが昨年の内閣府報告によれば、日本の科学者のうち、女性の割合は13%。先進国で最下位だ。

「女性の時代」と言われて久しい。一方で日本の女性科学者の惨めな数字。この現実、日本が本場に女性の時代が到来するのを望んでいるのか、疑わしく思わせる。アメリカの大学院は、男女や国籍に関係なく、正当に評価してくれた。「研究能力なし」と判断が下れば、容赦なく大学院生を退学させるのもアメリカ。でもそんな合理主義が、性に合っていた。研究室は、後にノーベル賞を受賞する科学者が何人も出

い 郁 恵  
り 森

### 百分の一

入りにしていた。自然に「超一流」を知ることになった。現在所属する名古屋大学理学研究科と、医学研究科の基礎研究部門の理学系教授百人のうち、女性は一人。つまり私は理学系教授の中で「百分の一」の存在だ。とかく一人は窮屈。でも、所属部署のリベラルな雰囲気は、アメリカに似て、自然体でいられる。中学や高校では、理不尽なことを言う男の先生に抗議すると「きさま!」と怒鳴られ、至極居心地が悪かった。女性教授を増やすため、理学系教授に要求される研究レベルを下げる必要は一切ないと思う。ただ、女性教授がたった一人増えるだけで「百分の二」、つまり倍になる。「ゼロよりはマシな一人」。そんな自分に別れを告げる日が待ち遠しい。(名古屋大教授)

2011.3.11

2011.3.11 1面 No.9